

ほんちょうぶかん

#12 本朝武鑑

板元：松会

刊行：貞享2年（1685）



解題

[281. 03/340]

■ 内容

2冊組の武鑑。武鑑とは、江戸時代に民間の書肆によって編集、出版された、大名家および幕府諸役人の名鑑である。17世紀中ごろから出版が始まり、大政奉還まで刊行され続けた。内容は年を追うごとに多彩になり、利用者の便宜のためにレイアウト等創意工夫が加えられ、改訂も頻繁に行われた。

当館所蔵本は貞享2年刊、大きさは12.5cm×19cmである。「大名付」（御三家をはじめとする大名家に関する情報を記載）1冊、「役人付」（大老・老中以下の幕府役人に関する情報を記載）1冊からなっている。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによると、このほか貞享3年（1686）から5年（1688）及び元禄6年（1693）に刊行された『本朝武鑑』の存在が確認できる。武鑑は当初『御紋尽』『江戸鑑』といった書名で刊行されていたが、松会が刊行したこの『本朝武鑑』ではじめて『武鑑』という名が使用され、以後も「〇〇武鑑」として使用され続けることになった。なお武鑑は実用書としてだけでなく、江戸見物の手引きや江戸の土産物としても利用されていたことが『本朝武鑑』の跋文からうかがえる。

■ 板元

板元は武鑑の製作から売り捌きまでを担当した。松会は江戸の有力書肆で、17世紀半ばから寛政年間まで続いたと考えられている。数年で武鑑の出版

から手をひく板元が多い中、松会は46年間にわたり武鑑を刊行し、現在のところ8種類が確認されている。このうち半数以上が貞享・元禄期に集中していることについて、松会は従来、京都で出版されたものを江戸で改刻した重板物を主に手掛けていたが、やがて重板行為は上方で問題とされるようになり、独自の出版物の必要に迫られたためと藤實久美子は述べている（『武鑑出版と近世社会』『江戸の武家名鑑』）。

貞享年間以後、当主松会三四郎はオリジナルな出版物の刊行に注力し、武鑑の記載内容の充実、レイアウトの工夫、書名の工夫にも努めた。なお松会が刊行した書物は古くから「松会板」（しょうかいばん）と呼称されているが、松会のヨミについては諸説あり、現在は「まつえ」と読むことが多いようである。



本文を読む

< 影印 >

「本朝武鑑」（役人付）（『江戸幕府役職武鑑編年集成』第3巻 深井雅海、藤實久美子編 東洋書林 1996）[281.03/284/3]

「本朝武鑑」（大名付）（『江戸幕府大名武鑑編年集成』第3巻 深井雅海、藤實久美子編 東洋書林 1999）[281.03/287/3]



参考文献

「松会版の探求-江戸出版人の代表」（『弥吉光長著作集』第3巻 日外アソシエーツ 1980）[010.8/6/3]

「松会版の探求 江戸初期の絵入本」「古武鑑の形式と年紀について」（『弥吉光長著作集』第5巻 日外アソシエーツ 1982）[010.8/6/5]

柏崎順子「松会三四郎」（『言語文化』32 一橋大学 1995）

※当館未所蔵 一橋大学機関ポジトリで閲覧可能

『武鑑出版と近世社会』藤實久美子著 東洋書林 1999 [023.1/369 a]

『江戸の武家名鑑』藤實久美子著 吉川弘文館 2008 [023.1TT/409]

柏崎順子「松会三四郎 其二」（『言語文化』45 一橋大学 2008）

※当館未所蔵 一橋大学機関ポジトリで閲覧可能